

「バチ笠地蔵」

(三岳山にまつわるお話)

小倉南区

むかしむかし、今では梅で有名な三岳梅林のあるあたりの村里に、作造じいさま夫婦が住んでおりました。

じいさま夫婦は田畠が少なくて、村人の下働きと山林の手助けで細々と食べていましたが、正直者で、まめに働くので正直作造、作じいさまと、大人から子供まで親しまれていきました。

じいさま夫婦はたいそう信心深く、氏神さま、お寺はもちろんのこと、道端の地蔵さまにまでお供えものをするほどでした。

ある年の、もう何日かで年も暮れるというある日、作造じいさまは、畠仕事の手間ひまに作つておりましたバチ笠を六枚ばかり城下町へ売りにいくことにしました。人並みの正月はできませんが、せめて尾頭付きのイワシでも神さまにお供えしたいもんだとばあさまと相談しましたからです。

その日は朝からちらちらと小雪が落ちていました。

作造じいさまは正月を迎えるしたくて忙しそうな家々を抜けて歩いていき、間もなく村の入り口にある護聖寺の山門下まできました。信仰深い作造じいさまのこと、ちょっとお地蔵さまにおまいりしていこうと立ち寄つてみると、かねてから信心しております六地蔵さまが頭や肩に雪をかぶり、北風に吹かれ、よだれかけが今にも飛んでしまいそうで、いかにも寒そうなお姿です。

「これはこれはお地蔵さま、寒うございましたでしような。何かさしあげられるもんがあれば良いのじやが。おお、そうじや、このバチ笠をさしあげますけ、お許しくだされ。」と城下町へ売りにいくはずだったバチ笠、ちょうど六枚を、お地蔵さまの雪を払いおとしてお一人おひと

り、六人の地蔵さまにかぶせてあげました。かぶせ終わって手を合わせて拝みますと、気のせいかお地蔵さまがにつこりなさつたようです。イワシは見えなくなりましたが、作造じいさまはすつかりうれしくなつて家へ帰つてきました。

ばあさまは、じいさまの帰りがあんまり早いので、びっくりしましたが、話をきいて、

「そりやあ良いことをなさつた。



お地蔵様もさぞ喜んでいなさるじやろ。」と一緒に喜びました。

大みそかの夜、じいさまとばあさまは囲炉裏いろりをかこんでゆつくりすごしているうちに、いつのまにかうとうとど眠つてしましました。外はさらさらと真つ白な雪が降りしきっています。すると、裏口の戸の戸がするすると開きました。「おや、今頃誰じやろうか。」とじいさまは眠い目をこすりこすり見ますと、バチ笠かぶつた地蔵さまが六人、米俵こめだわら、塩しお魚さかな、煮メ箱にしめばこ、重ねモチ、酒樽さかだるなど次々に運び込んで、ものも言わずに姿を消してしまいました。

じいさまばあさまはびっくりしてしまい、しばらく動けません。ほつべたをつねつてみますと痛い。いた「夢じやないぞ、ばあさま。」「ありがたいことじや、なんまだぶ。」戸口にすわつて二人で手を合わせました。

明けて正月元旦、降りしきつた雪で山も畠も美しいことこの上ありません。作造じいさま夫婦は、昨夜お地蔵さまが運んでくれたごちそうで、何十年ぶりかで、良いお正月を迎えることができました。